

※今日から我が家は騒がしいスペシャル
(前編)

○登場人物

○森川京太郎 (47)

○佐田真澄 (50)

○森川渉 (18)

○森川さくら (15)

○桂川斗馬 (31)

○タカコ (49) (後編から出てきます)

○ツバサマム (45) (後編から出てきます)

○森川京子 (54)

○佐田久美子 (74) 真澄の母。

○室井咲子 (74) 京太郎の義母。(後編から出てきます)

○マンション・森川家・京太郎の部屋・中
(朝)

朝日が部屋に差し込む。

目を覚ましベッドの中で伸びをする森川京太郎。

ベッドから起き上がり、窓から外の景色を見る京太郎。

京太郎「秋らしくなってきたなあ」

凜の仏壇の前に座り手を合わせる京太郎。

京太郎M「凜：今日も一日が始まったよ。今日も穏やかな一日になるよう見守ってくれとよ」

○同・同・ダイニングキッチン(朝)

京太郎が来る。

朝食を取っている娘のさくらと息子の渉。

京太郎「二人共おはよう」

さくら「おはようございます」

渉「おはよう」

キッチンへ行きコーヒーを作り始める

京太郎。

京太郎「段々、寒くなって来たな。二人とも

今日は朝から出掛けるのか？」

桜「はい、私は必ず子先生の所へ行きます」

渉「俺も。ツバサママがお店掃除するって言

ってたから手伝ってくる」

京太郎「そっか……」

京太郎がコーヒーカップに入れ飲もう

とした時に、音も無く佐田真澄が入っ

て来る。

真澄を見て驚きコーヒーを噴き出す京

太郎。

京太郎「（コーヒーが顔に飛び散り）熱っ！」

さくら「真澄さんおはようございます」

渉「真澄さん、おはよう」

真澄「ああ、二人共。おはよう」

椅子に座る真澄。

京太郎を見る真澄。

京太郎が、眉間に皺をよせ顔に着いた
コーヒーを拭いている。

真澄「何してんの？」

京太郎「何してんのって、あのですね……」

真澄「何？」

京太郎「何でもありませんよ」

さくら「今日は珍しくお父さんがすぐ折れま
したね」

京太郎「さくら。折れたんじゃない。相手に
しないだけだ」

真澄「……」

浮かない顔してコーヒーを飲む真澄。

言い返してこない真澄に戸惑う京太郎。

渉が空気を察し

渉「さくら、もうすぐ出るのか？」

さくら「（察して）そうですね。ちょっと今

日は早めに来るようになると言われてましたの
で」

立ち上がる渉とさくら。

渉「じゃ俺も行くわ、行ってきます」

さくら「行ってきます」

京太郎「行つてらっしゃい。二人とも氣を付けて行くんだぞ」

真澄は手だけ上げている。

溜息を吐き真澄の向かいに座る京太郎。

京太郎「何があつたんですか？」

真澄「あ？」

京太郎「あ？で、ごまかさないで下さい」

真澄「はい」

京太郎「怖い」

真澄「は？」

京太郎「素直に返事するし、つかかってもこないし、何か病氣ですか？」

手を真澄の額に当てる京太郎。

真澄が鬱陶しく手を払う。

真澄「京ちゃん、お願いがある」

京太郎「お願い？何ですか？」

真澄「良いですよって言つてくれないと言わない」

京太郎「じゃあ言いません」

立ち上がろうとする京太郎の腕を握って座らせる真澄。

京太郎「痛てえ：（溜息）分かりましたよ。何ですか？」

真澄「あのな：」

真澄が言いかけると、ドタドタと足音を鳴らし怒った京子が入って来る。

京太郎「あぁっ！もう朝から鬱陶しい！」

京子「あいつ！許せない！京太郎。私今日からここで暮らすからね！」

京太郎「はぁ？」

京子「斗馬がね。斗馬が浮気してたの！」

京太郎「ええ？」

京子「やっぱり私みたいな年上じゃなくて、本当は若くてピチピチした子の方が良いのよ。あいつの本性がやっと分かった」

ソファ―に座り泣きだす京子。

浮かない顔をしている真澄。

二人を見て、うんざりしながら座る京太郎。

○同・同・玄関・前

旅行支度をした京太郎と真澄が出て来る。

二人を京子が見送る。

京太郎「じゃあ行ってきます」

真澄「すみません、京ちゃん借ります」

京子「こんなので良かったら、全然連れてって」

京太郎「こんなのって何だよ！」

京子「もういいから。早く行きなさいって。

真澄さんのお母さん心配でしょ。涉とさく

らの事なら任せといて」

京太郎「ああ：じゃあ（真澄に）行きますか？」

真澄「ああ」

○電車・中

京太郎と真澄が並んで座っている。

京太郎「あの：一ついいですか？」

真澄「え？」

京太郎「あの、どうして：私なんですか？」

真澄「何が？」

京太郎「何がって：何で私が貴方と一緒に
お母さんの所へ行かなくては：私じゃなくて
もタカコさんやツバサさんが居るじゃない
ですか」

真澄「あいつらはダメだ」

京太郎「何で？」

真澄「母ちゃんが本当に死んでしまう」

京太郎「え：」

真澄「これ以上言わせないでくれ」

京太郎「（察して）はい」

真澄「恋人のフリしてくれて頼んだのも、
悪いと思ってる：」

京太郎「：」

真澄「母ちゃんの死に目に会えたら、この人
が俺の恋人だよって。だから俺の事はもう
心配しなくていいからなって言ってあげた
い。嘘でもいいから最期位」

優しく真澄の肩に手を当てる京太郎。

○山梨県の街並み

○大月駅・前（夕）

京太郎と真澄が改札から出て来る。

京太郎「大月なんて初めて来ましたよ」

真澄「こんな田舎な所来る事ないもんな」

京太郎「いや：それでここからどこ行くんですか？」

真澄「こっちだ」

真澄に付いて行く京太郎。

○道（夕）

京太郎と真澄。

急に真澄が立ち止まり。京太郎が真澄にぶつかる。

京太郎「痛い！何ですか急に止まったりして」

真澄「あっ」

京太郎「え？」

真澄が指さした先に真澄の母が働いている小さな食堂がある。

京太郎「食堂？え？お腹空いたとかじゃないですよね？」

真澄「違うよ！母ちゃんの店なんだよ」

京太郎「ああ……」

真澄「ってか、電気点いてるし、誰か居るのか？」

店に近づいて行く京太郎と真澄。

○食堂「さだ」・前（夕）

京太郎と真澄が来る。

京太郎「ここが、お母さんがやってる店ですか？」

真澄「ああ……」

ドアを開け中に店に入っていく真澄。

○同・中（夕）

真澄が入り、京太郎も続けて入って来る。

中には数人のお客が食事をしたり、待っている。

真澄の母久美子（久母）が一人で切り盛りしている。

真澄「え……？」

久美子「はい、いらっしゃーい」

真澄と久美子の目が合う。

一瞬の沈黙後、久美子がまた動き回ります。

京太郎「どうしました？あの方、パートの方ですか？」

真澄「母」

京太郎「ああ……えっ？！お母さん？」

頷く真澄。

京太郎「何で？お母さん倒れて意識不明って」
久美子の所へ行く真澄。

真澄「どういう事なんだよ」

久美子「何が？」

真澄「倒れたんじゃないのかよ？意識不明になってるんじゃないのかよ？」

久美子「（動きながら）はあ？勝手に意識不明にしないでくれる？忙しいんだから」

真澄を払いのけ客の定食を持って行く

久美子。

真澄「隣の小春おばさんから連絡があったんだよ。母ちゃんが倒れて意識不明でもう危ないって」

久美子「ああ、小春？いつつも大袈裟なのよ。ちよっと忙しいんだからそんなとこ突っ立ってたら邪魔！」

怒りで体が震える真澄。

京太郎「と、とりあえず席に座りましょ」

怒り心頭の真澄を宥めて席に座る京太

郎と真澄。

久美子が来る。

久美子「注文は？」

真澄「……」

京太郎「（察して）な、何にしようかなあ……

おすすめはありますか？」

真澄・久美子「かつ丼」

真澄と久美子が見合つて直ぐに顔を逸らす。

京太郎「かつ井をじゃあお願いします（

真澄を見て）二つお願いします」

久美子「はい。お待ち下さい」

厨房に入っていく久美子。

京太郎、真澄を見る。

真澄は怒りながらも少し安堵した表情。

○マンション・森川家・ダイニングキッチン

（夜）

さくらがカレーを皿によそっている。

ソファーで伸び切っている京子。

渉が帰って来る。

渉「ただいまー」

さくら「お兄ちゃん、お帰りなさい」

渉「お父さんから連絡あった？」

さくら「はい。一先ず真澄さんのお母さんは無事だったみたいです」

渉「そっか。良かった」

伸びてる京子を見て驚く渉。

渉「きょんさん、どしたの？」

さくら「斗馬さんが浮気をしてたらしいです」

渉「ええ？」

京子「あいつ、本当にムカつく許さない」

さくら「きょんさん、カレー出来ましたから

食べましょ」

京子「ああっ！もうどうして私が浮気されな

きゃなんないのよ！」

足をジタバタさせる京子。

渉・さくら「：」

○佐田家・居間（夜）

真澄、久美子、京太郎が来る。

真澄「どういう事なのか、聞かせてもらおう

か？」

服などを片付け、真澄の父の仏壇の

前に座る久美子。

久美子「何がよ？」

目を閉じ手を合わせる久美子。

真澄「どうして、倒れて意識不明の母ちゃんが元気に働いてるんだよ。死にそうな雰囲気皆無だったじゃないか」

久美子が真澄と京太郎の方を向き、

京太郎をずっと見ている。

京太郎「（視線に気づき）え？」

久美子「真澄、この人誰よ」

真澄「え？ああ：俺の恋人」

久美子「恋人？」

京太郎「は、はい：真澄さんとお付き合ひさせてもらってます。森川京太郎と申しま

す」

久美子「（間を取って）あ、そう」

真澄「何だよ。そのリアクション」

久美子「別に：」

真澄「こんなじゃ帰ってこなきゃよかった」

京太郎「ちよつと真澄さん」

真澄「だってそうだろ。こっちは別に帰ってきたくなんかなかったのに、流石に母が

倒れたとか聞いたら」

久美子「……父ちゃんがなくなった時は帰ってこなかったアンタが」

真澄「それは……」

久美子「まあ折角帰って来たんなら、少しゆっくりして行けば」

立ち上がり台所へ行き洗い物を始める
久美子。

その後ろ姿を見て、改めて年を取った
など思う真澄。

京太郎「……」

○同・二階・真澄の部屋・中（夜）

真澄と京太郎が来る。

部屋は昔のままで本棚にぎっしりと本
が収まっている。

京太郎「わぁ、本が沢山」

真澄「昔から、本読むの好きだったからな
あ」

京太郎「文学少年が、小説家になって夢を果

たしたわけですね」

真澄「まあな」

京太郎「お母さん。倒れてなくて良かったです
ね」

真澄「ああ……」

京太郎「結局元気だったんだから、私の事彼
氏って紹介しなくても良かったのに。真
澄さんもう言っちゃうから」

真澄「……」

京太郎「だから、私もそのまま乗っかかりま
したよ。このまま帰るまで恋人同士で居ま
しょ」

久美子の声「真澄、風呂沸いたから入りなさ
い」

真澄「ああ。（京太郎に）一緒入るか？」

京太郎「はあ？ いいですよ。お先に」

真澄「折角恋人同士になったのに」

京太郎「なってません！ 恋人同士にはなって
ません！」

舌打ちをして出て行く真澄。

京太郎「何で舌打ちされなきゃいけないんだ」

○同・風呂場・中（夜）

京太郎が湯舟に浸かっている。

隣に真澄が居る。

真澄「狭いなあ」

京太郎「貴方が恋人同士何だから一緒に入れ
って言ったんでしようが」

真澄「ここまで狭かったって忘れてた」

京太郎「まあでも、こんな感じのお風呂、懐
かしくていいもんですね」

湯船から上がる真澄。

京太郎「え：もういいんですか」

真澄「窮屈すぎて、息苦しいから、先上がる」

京太郎「（溜息）だから、別々で入った方が
良かったって言ったのに：」

○同・居間（夜）

風呂上がりの京太郎。

久美子が自分の部屋で布団を敷いてい

る。

京太郎「お風呂頂きました」

久美子「はい。狭かったでしょ」

京太郎「いえ……」

久美子「まさか二人で入るとは思ってなかったから」

京太郎「……」

久美子「ねえちょっと（手招きして）」

京太郎「はい」

久美子「京太郎さん……貴方真澄の恋人じゃないでしょ？」

京太郎「え……」

久美子「私はあの子の母親だからね。分かるの」

京太郎「あの……」

久美子「あの子がゲイって告白した時、その気持ち受け止めてあげてはいたんだけど、主人が許さなくてね。もう二人は大喧嘩。それでそのまま家出て行ったのよ。あれから一度も帰ってこなかった。さっき話した

けど主人が亡くなった時もね。口悪くて人付き合いもそんな得意じゃないあの子が貴方を信頼して恋人のフリをしてってくれて頼んだんだと思う。嫌な思いさせて悪かったわね」

京太郎「いや、そんな」

久美子「私も歳でいつまであの店続けられるか分からないからついお隣に愚痴をこぼしたのよ。それで気を利かせて私を倒れたって事にして真澄を呼びつけたんだと思う。久しぶりに見た息子の顔老けてたわね」

笑う久美子に苦笑する京太郎。

久美子「京太郎さん」

京太郎「はい」

久美子「口が悪い憎たらしい真澄だけど、あの子の事、友達でいいんで仲良くしてやってください。貴方みたいな人、あの子の周りに居なかったから：お願いします」

頭を下げる久美子。

京太郎「いやいや、お母さん顔を上げて下さ

い」

顔を上げると、久美子の目が涙ぐんでいる。

京太郎「お母さん。安心して下さい。私で良ければ。隣に居させてもらいますから。実際家も隣同士なんですけどね」

久美子「まっ、そうなの？」

京太郎「それに、真澄さんにはうちの子供達も助けてもらった事沢山あるんで」

久美子「そうなの」

京太郎「はい。あっでは休ませてもらいますね。おやすみなさい」

久美子「おやすみなさい」

○同・二階・真澄の部屋・中（夜）

京太郎が入って来る。

布団を並べて待っていた真澄。

真澄「遅かったなあ。何してたんだよ」

京太郎「何って」

真澄「風呂でのぼせて死んでるのかと思った」

京太郎「殺さないで下さい。あつ布団敷いてくれてありがとうございます」

真澄「何だったのかな？」

煙草を出し、ライターで火を点け吸い出す真澄。

京太郎「え？」

真澄「もうここには二度と帰って来るつもり無かったのにな」

京太郎「：」

真澄「明日になったらすぐ帰るぞ」

京太郎「真澄さん」

真澄「ん？」

京太郎「明日、私は先に帰るので、真澄さんはもう少しお母さんの所に居てあげて下さい」

真澄「はあ？何で？」

京太郎「何でって、久しぶりに帰って来たんじゃないですか。久しぶりの親子の時間もっと楽しんで下さいよ。きつとお母さんにも真澄さんに会えて嬉しかったと思

いますよ」

真澄「いいよ、めんどくさい」

京太郎「また、そういう事言う。お互い、これから何度会えるか分からないんですよ。

大切な時間をまた親子で作るのにいい機会なんですか」

真澄「京ちゃん、説教臭いよ」

京太郎「説教臭くなんかんですよ。何言ってるんですか」

真澄「ああ、もう自分で説教臭い事言ってるのも分からなくなってるんだ。俺よりも年下だね？もしかしてそれ嘘じゃない？京ちゃんの方がめっちゃ歳行ってるんじゃないの？」

京太郎「またそういう言い方をする。どうしてそういう口の利き方しか出来ないんですか？」

真澄「生まれつきだから仕方ないだろ。もんくいうなら俺の母ちゃんに言ってくれ」

京太郎「ほんと貴方って人は！」

立ち上がる京太郎。

真澄「何だよ？」

真澄も立ち上がる。

京太郎「貴方ね。少しはお母さんの気持ち考えてあげたらどうなんですか？」

真澄「んな事、言われなくたって分かってるよ！」

京太郎「だったらもうちょっと、素直になつてお母さんとの時間作ったらどうですか」

真澄「……」

布団の上に座り直す真澄。

京太郎も座り

京太郎「いつまでも、大切な人って居る訳じゃないんですよ。明日急に居なくなる事だつてあるんですから……」

真澄「わ、分かったよ……」

京太郎「素直で宜しい（真澄の肩に手を当て）いつもこのくらい素直に……」

真澄が京太郎の腕を掴み、そのまま京太郎を押し倒す。

京太郎「な！」

真澄「俺がそう簡単に素直になるわけないだろ！」

京太郎に馬乗りになりくすぐる真澄。

京太郎「ちょ！止めろ！止めろ！！！」

体をくねらせながら、ゲラゲラ笑っている京太郎。

隙を見て形勢逆転して京太郎が真澄に馬乗りになりくすぐりだす。

京太郎「人が真面目に話してる時くらいちゃんと聞け！」

真澄「ぎゃー！死ぬ！笑い死ぬ！」

肩で息をしながらもゲラゲラ笑っている京太郎と真澄。

思い切り襖を開ける久美子。

久美子「ちよっと！アンタ達！！！」

京太郎と真澄の動きが止まる。

久美子「ドタバタドタバタ、うるさいのよ！

寝れやしないでしょ！」

京太郎「す、すみません……」

久美子「静かに寝なさい！」

真澄「はい……」

襖を思い切り閉める久美子。

顔を見合う京太郎と真澄。

○同・廊下（夜）

真澄の部屋の前に居る久美子。

フツと笑い部屋を後にする。

○同・真澄の部屋・中（朝）

布団は畳まれ京太郎が帰る支度をして
いる。

隣で真澄は寝ている。

京太郎「じゃあ真澄さん。先に帰りますから
ね。お母さんにしっかり親孝行してください
いね」

部屋を出ようとしている京太郎の足を

真澄が掴み京太郎の絶叫。

京太郎「あービックリした。殺す気ですか？」
真澄「京ちゃんはそう簡単に死にやしねえよ」

京太郎「ほんと、子供みたいな事して」

真澄「実家に戻ったら子供になるんだよ」

京太郎「戻ってなくても子供みたいですよ。」

屁理屈ばかり言って」

真澄「ありがとうな」

京太郎「（聞こえてはいるが）え？」

真澄「何でもない」

京太郎「（苦笑して）じゃあお先に」

部屋を出て行く京太郎。

○同・玄関・中（朝）

靴を履き終える京太郎。

久美子が見送りをしている。

京太郎「それでは、失礼します」

久美子「京太郎さん、ありがとうね」

京太郎「いいえ、私は何も。真澄さんが自分でここに来たんですし、それに着いてきただけですから。私よりお隣さんにお礼を言った方が良くかもしれませんね」

久美子「（笑って）そうね」

京太郎「では」

久美子「また、真澄と遊びにいらっしやいね」
京太郎「はい」

○同・キッチン

久美子が洗い物をしている。

真澄が来る。

真澄が背後に居る事に気付く久美子。

久美子「起きたの？」

真澄「ああ」

久美子「京太郎さん、先帰ったよ」

真澄「知ってる」

テーブルに置いてあった糠漬けをつま

み食べる真澄。

真澄「うまっ」

久美子「こら、ちゃんと箸使いなさい」

箸を真澄に渡す久美子。

久美子「もうすぐ、お昼出来るから待ってな
さい」

黙って座る真澄。

久美子「京太郎さん、良い人ね」

真澄「そうか？」

久美子「アンタみたいなのは京太郎さんみたいなのが隣に居たら母さん安心するわ：

真澄。大切にしなさいよ」

真澄「はいはい」

久美子「ったく」

真澄「なあ、今日店あんの？」

久美子「今日は休み」

真澄「何だ。折角手伝ってやろうと思ったのに」

久美子「恩着せがましい事言うなら帰ってよ。

母さん、店休みでも忙しいんだから」

真澄「俺が帰ったら淋しいくせに」

久美子「お父さん亡くなってもずっと一人だっただから、淋しくもなんともないの」

真澄「素直じゃねえな」

久美子がフツと笑うと真澄もフツと笑う。

○マンション・森川家・前・廊下（朝）

エレベーターから京太郎が出て来る。

京太郎「ああ、疲れた……」

玄関に目をやると、前で疲れ果てて座り込んでいる斗馬が居る。

驚き悲鳴を上げる京太郎。

京太郎「何で？ 何でこんな所に居るの？ 心臓止まるって」

京太郎に気付き、立ち上がる斗馬。

斗馬「お義兄さん」

京太郎「お義兄さんじゃあない。まだ、お義兄さんになってない！」

斗馬「助けて下さい。お願いします」

ゾンビのように京太郎に絡みつく斗馬。

京太郎「ちょ！ ちょっと止めなさい！ どうせ姉貴に会いに来たんでしょ？」

斗馬「ダメなんです」

京太郎「はあ？」

斗馬「京子さん、僕が浮気してるって勘違いしてるんです」

京太郎「俺に言わないで姉貴に直接言ったらいいでしょう」

斗馬「言いましたよ。でも会いたくないって言われて」

京太郎「それで、ずっとこのまま？」

頷く斗馬。

京太郎「ちよっと、風邪引くでしょ。もう寒くなってきたのに」

斗馬「だから、お義兄さんからも話して下さいよ」

京太郎「勘弁して下さいよ。もう二人に巻き込まれたくないんだよ」

斗馬「そんな事言わずに」

京太郎「ああ、もう分かりましたよ。こんなところ近所に見られたらもっと最悪だ。中に入して下さい」

斗馬に絡まれたまま、玄関を開ける京太郎。

○同・森川家・玄関・中（朝）

京太郎と斗馬が来る。

京太郎「ただいま」

京子が来る。

京子「お帰り」

斗馬を見て顔色が変わる京子。

京子「何で一緒に居るのよ！」

京太郎「何でって、喧嘩してるんだろ？玄関で座り込んでさ。近所の目もあるだろう」

陰から涉とさくらが玄関を見ている。

京子「私、この人の顔もう二度と見たくないの！」

京太郎「そんな事言うなよ。良く分かんないけど、ちゃんと話し合って」

京子「良く分かんないなら、口出さないでよ」
うんざりする京太郎。

京子「早く出て行かないと：殺るわよ！私本気だよ！」

身震いし、悲鳴を上げながら出て行く
斗馬。

京太郎「え？出て行った？」

京子「（ドアを開け）二度と面見せるんじや

（ないよ）」

京太郎「ちよつと近所迷惑！」

京子の口を押え家の中に入っていく京太郎。

後編へ続く。